

しまくとぅば普及関係者各位

沖縄語教育研究 11

## 漢字に仮名を振るとはどうか(4枚)

翻訳並記や印象並記などは、振り仮名ではない

2010年3月26日

沖縄語研究家 船津好明

漢字に仮名を振るとは、漢字の読ませ方を、漢字の傍に仮名で付記することを言います。原則として読ませるべき漢字の至近位置に振ります。通常、横書きでは漢字の真上に、縦書きでは漢字の右真横に振ります。

漢字を日本語としてどう読ませるかは、学校で教えますから、学校を卒業した人が読む普通の日本語の漢字には振り仮名はつけません。そういう人は、漢字に振り仮名があっても、振り仮名に頼らずに漢字を読み、振り仮名には無頓着です。しかし、児童や日本語を学ぶ外国人には、漢字に振り仮名がないと、正しく読むことは困難です。

漢字を含む沖縄語の文では、漢字には常に振り仮名が必要です。なぜなら、人々は沖縄語の漢字を沖縄語で読むのに慣れていないからです。子供や外国人が、振り仮名なしの日本語文が読みにくいと同じです。沖縄語の漢字は、原則として日本語の読み音と意味において関連があるものを使います。

世間には、漢字の振り仮名の意味を取り違えている人がいます。その人達は漢字と仮名を並べて、沖縄語の意味を日本語で示そうとする意図のようですが、そのような仮名の表記は振り仮名ではありません。

私達は日本語を知っているので、日本語の現在の表記法と整合させることが、既存知識を活用することになり、学習負担を軽くします。

沖縄語は日本語の下位言語ではありません。だからといって、沖縄語の表記を日本語の表記に揃えないと、学習負担が重くなり、学力の低下や普及の停滞を招きます。日本語の表記との整合を計るのはそのためで、日本語への追従ではありません。

### 個々の漢字に仮名を振る場合

このような場合が大部分です。以下に適否の例を示します。

例1: a <sup>ぐしくま</sup>城間      b <sup>ぐしくま</sup>x城間

bが悪い理由は、漢字の字間を広げると分かります。

<sup>ぐし</sup> <sup>くま</sup>  
城 間

これは「城」を「ぐし」と読み、「間」を「くま」と読ませることになり、学習者を困惑させ、教育上不適切です。bは漢字への振り仮名ではなく、漢字の文字列とその読み方を仮名にして並べたに過ぎません。aは正しい振り方です。漢字の字間を広げると

<sup>ぐしく</sup> <sup>ま</sup>  
城 間

となり、漢字と振り仮名が適切に対応していることが分かります。正しい振り仮名は、字間を変えても保たれます。

参考：日本語の場合

じむきょくちょう  
× 事務局 長      字間を広げてみると      × 事 務 局 長

じむきょくちょう  
事務局 長      字間を広げてみると      じ む きょく ちょう  
事 務 局 長

うにげー  
例 2 : c × お願い

c のような書き方を見かけますが、沖縄語の教育上不適切です。「うにげー」を日本語で理解させようとしたものと思われます。沖縄語は沖縄語で理解すべきものです。

お 願 い  
例 3 : d × うにげー

d のような書き方も見られます。これも c と同様、沖縄語の教育上好ましくありません。平仮名に漢字のルビを振ったものです。

くくる  
例 4 : e × ころ

e のような書き方も、沖縄語の教育上好ましくありません。個々の仮名は意味を持たず、音を表すものですが、この表記では「こ」を沖縄語として「く」と読ませようとしています。また、本稿では振り仮名は漢字に対して振ることにしていますから、e のように仮名に仮名を振るのは論外です。

ころ                      heart  
例 5 : f × くくる      g × くくる

このような、沖縄語の教育上不適切な例は限りがありません。

ルビと振り仮名は違います。ルビは小さな活字のことですから、f も g もルビを振ってはありますが、振り仮名ではありません。振り仮名とは、漢字に対して振った仮名を指しますから、これらは論外です。沖縄語の教育上不適切です。

ちむ                      ちむ  
例 6 : h × 心      i      肝

h のような表記はたくさん見られますが、沖縄語の教育上好ましくありません。「心」は読み音において日本語と関係づけができないからです。「肝」は読み音と意味において日本語と関連していますから、i は好ましい表記です。

h のような書き方を主張する人は、日本語で解り易いからといます。この人たちは、沖縄語は日本語の下にあり、日本語で理解するもの、と考えているようです。沖縄語は日本語と関係がありますが、日本語の下位言語ではなく、独立言語です。沖縄語は沖縄語で考えるべきです。

例 7 : 送り仮名を漢字の読みに含めることは、特に沖縄語の初等教育においては好ましく

ありません。

と あちけ                      といあちけー  
取い扱ー                      × 取 扱

参考：日本語の場合

「とりあつかい」は初等教育では「取り扱い」と活用する形で教えます。

「取扱注意」と言う表示は昔からあって、「とりあつかいちゅうい」と読みます。初等教育で「取り扱い」と覚えておくと、後に出てくる「取扱」も「とりあつかい」と読めるようになります。沖縄語でも同じです。

例8： 漢字の読み音でない音で漢字と分離できる音は、沖縄語の教育においては、原則として振り仮名にはしません。ただし、固有名詞は別です。

うちなー ちゅ                      うちなーんちゅ                      やまと ちゅ                      やまどんちゅ  
沖 縄 人                      × 沖 縄 人                      大 和 人                      × 大 和 人

沖縄語の教育上はこのように表記することとしますが、このように覚えれば振り仮名なしの「沖縄人」に遭遇しても「うちなーんちゅ」と読めるようになります。

#### 、複数の漢字にまとめて仮名を振る場合

複数の漢字を読むのに、個々の漢字を読むのではなく、複数をまとめて読む場合は、読まれる漢字全体に仮名を振ります。音の融合による変音を含みます。例は少ないです。

例9：                      やまと                      や                      まと                      とすい                      とす                      い                      くねーだ                      くねーだ  
大 和                      × 大 和                      年 寄                      × 年 寄                      此 間                      × 此の間

たでーま                      たでー                      ま  
只 今                      × 只 今

参考：日本語の場合

あじさい                      あ                      じ                      さい                      いちじく                      いち                      じ                      く  
紫 陽 花                      × 紫 陽 花                      無 花 果                      × 無 花 果

日本語にはこのような当て字が過去にたくさんできましたが、沖縄語の教育においては、これを真似たり、これに類する当て字を新規に作るのは、好ましくありません。

#### 、翻訳並記や印象並記は振り仮名ではない

沖縄語を仮名で、その日本語訳を漢字で書いたり、日本語での印象を漢字で当てたりしている例が非常に多く見られます。沖縄語の教育上不適切です。

例10：                      ちら                      がっけん                      わらびぬくる                      じんぬくばいかた                      やーむっちょーるみなぐ  
× 顔                      × 承 諾                      × 少年時代                      × 予 算 案                      × 主 婦

これらは沖縄語の仮名に、書き手が選んだ日本語の漢字で翻訳したり、感じた印象の漢字を並べただけです。これらの仮名は振り仮名ではありません。「わらびぬくる」は書き手の意

思で「<sup>わらびぬくる</sup>少女時代」とも書けます。子供の頃が戦争中だったという印象を表したければ

<sup>わらびぬくる</sup>  
「戦争中」などとも書けます。このような表記は、沖縄語の教育上好ましくありません。

### 、漢字の後の仮名による補足書きは、振り仮名ではない

例 11： 三線（さんしん） 三味線（さんしん） 三絃（さんしん）

これらは振り仮名とは別のものです。

### 、文芸と表現の自由

本稿では沖縄語の教育に用いる表記のほかは、是非を論じません。研究用の表記も論じません。表現は自由ですから、書き手によって多様の表現ができます。ただし、表現の自由を主張するのは、書き手に確かな意図がある場合に限られます。「戦争中」とどうしても書きたい場合、それを妨げることはできません。表現の自由に基づく表記は、教育用の表記とは別のものです。

### 、適切な教育用の表記とは何か

児童や若者その他学習者の学習負担が軽いこと、児童等の学力の向上が期待できること、この二点が重要であると考えます。学習負担を軽くするためには、誰が書いても同じになるような表記法でなければなりません。

### 、適切な教育用表記法の必要性

日本語の読み書きは、昔は学問でしたが、現在は常識になっています。それは表記法を平易にして初等教育で教えたからです。

沖縄語においては読み書きが、まだ常識となっておりません。教育に用いる表記が平易で適切であれば、沖縄語の読み書きも常識になっていきます。

沖縄語の普及関係者各位には、現在見られる種々の表記法を試みられ、各位の立場で教育に適する表記法を見出されるよう希望します。

### 連絡先

〒1870002 東京都小平市花小金井 2-6-1  
船津好明

Tel/Fax 042-467-1273

Email funatsu@mfv.biglobe.ne.jp